

Title	セメント樽の中の手紙
Author(s)	葉山, 嘉樹
Citation	多言語翻訳 : 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』. 2013, p. 5-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61314
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

セメント樽の中の手紙

はやまよしき
葉山嘉樹

まつどよぞう
松戸与三はセメントあけをやっていた。ほかぶぶんたいめだ
頭の毛と、鼻の下は、セメントで灰色に蔽われていた。かれはなあなゆびつこ
で、鉄筋コンクリートのように、鼻毛をしゃちこぼらせている、コンクリートを除り
たかったのだが、いっぶんかんじゅっさいはだ
一分間に十才ずつ吐き出す、コンクリートミキサーに、間に合わ
せるためには、とてもゆびはなあなもい
指を鼻の穴に持って行く間はなかった。

かれはなあなきとうとうじゅういちじかんあいだひるめしさんじやすにど
彼は鼻の穴を気にしながら遂々十一時間——その間に昼飯と三時休みと二度だけ
やすひるときはらすたひと
休みがあったのだが、昼の時は腹の空いてるために、も一つはミキサーを掃除してい
ひまとうとうはなてとどあいだはなそうじ
て暇がなかったため、遂々鼻にまで手が届かなかった——の間、鼻を掃除しなかつ
た。かれはなせつこうざいくはなこうか
た。彼の鼻は石膏細工の鼻のように硬化したようだった。

かれしまいじぶんてうつたるちいきはこ
彼が仕舞時分に、へトへトになった手で移した、セメントの樽から、小さな木の箱
が出た。

なんかれふしんおもかまい
「何だろう？」と彼はちょっと不審に思ったが、そんなものに構っては居られなかつ
た。かれますはかこますふね
た。彼はシャベルで、セメント樽にセメントを量り込んだ。そして樽から舟へセメント
あまたこのたるあ
を空けると又すぐ此樽を空けにかかった。

「だが待てよ。セメント樽から箱が出るって法はねえぞ」

かれこぼこひろはらどんぶりなかほうこはこかる
彼は小箱を拾って、腹かけの井の中へ投げ込んだ。箱は軽かった。

「軽い処を見ると、金も入っていねえようだな」

かれかんがまつぎたるあつぎますはか
彼は、考える間もなく次の樽を空け、次の樽を量らねばならなかった。

からまわはじしゅうぎようじかん
ミキサーはやがて空廻りを始めた。コンクリがすんで、終業時間になった。

かれひみずひまかおてあら
彼は、ミキサーに引いてあるゴムホースの水で、一と先ず顔や手を洗った。

べんとうばこくびまいっばいのくせんもんかんがかれ
そして弁当箱を首に巻きつけて、一杯飲んで食うことを専門に考えながら、彼の
ながやかえいはつでんしょはちぶどおできあがつゆうやみそびえなさんま
長屋へ帰って行った。発電所は八分通り出来上っていた。夕暗に聳える恵那山は真つ
しろゆきかぶあせからだきゅうここつめかんはじかれ
白に雪を被っていた。汗ばんだ体は、急に凍えるように冷たさを感じ始めた。彼
とおあしもときそがわみずしろあわかほ
の通る足下では木曾川の水が白く泡を嚙んで、吠えていた。

「チェッ！ やり切れねえなあ、嬢は又腹を膨らかしやがったし、……」彼は

こどもまたこのさむめうまこどもめちやくちや
ウヨウヨしてる子供のことや、又此寒さを目がけて産れる子供のことや、滅茶苦茶に

う かかあ こと かんが まった
産む 嬢の事を考えると、全くがっかりしてしまった。

いちえんきゅうじゅうせん にっとう なか ひ ごじゅうせん こめ にしょうく きゅうじゅうせん
「一円九十銭の日当の中から、日に、五十銭の米を二升食われて、九十銭で
き す べらぼうめ の
着たり、住んだり、篋棒奴！ どうして飲めるんだい！」

かれ どんぶり なか こぼこ こと おも だ くれ はこ
が、フト彼は 井の中にある小箱の事を思い出した。彼は箱についてのセメント
を、ズボンの尻しりでこすった。

はこ なん か がんじょう くぎ
箱には何にも書いてなかった。そのくせ、頑丈に釘づけしてあった。

おも ぶ くぎ
「思わせ振りしやがらあ、釘づけなんぞにしやがって」

かれ いし うえ はこ ぶ つ こわ よ なか ふ
彼は石の上へ箱を打っ付けた。が、壊れなかったので、この世の中よなかでも踏みつぶす
き やけ ふ
気になって、自棄に踏みつけた。

かれ ひろ こぼこ なか つつ かみき で
彼が拾った小箱の中からは、ボロに包んだ紙切れが出た。

か
それにはこう書いてあった。

わたし がいしゃ ぶくろ ぬ じょう わたし こいびと クラッシャー
——私はNセメント会社の、セメント袋を縫う女工です。私の恋人は破砕器
いし い しごと じゅうがつ なのか あさ おお いし い
へ石を入れることを仕事にしていました。そして十月の七日の朝、大きな石を入れ
るとき、その石と一緒に、クラッシャーの中へ嵌りました。

なかま ひと たす だ みず なか おぼ いし した
仲間の人たちは、助け出そうとしましたけれど、水の中へ溺れるように、石の下へ
わたし こいびと しず い いし こいびと からだ くだ あ あか ほそ
私の恋人は沈んで行きました。そして、石と恋人の体とは砕け合って、赤い細い
いし うえ お ふんさいどう はい い
石になって、ベルトの上へ落ちました。ベルトは粉碎筒へ入って行きました。そこで
どうてつ だんがん いっしょ こまか こまか おと のろい こえ さけ くだ
銅鉄の弾丸と一緒にいっしょなつて、細く細く、はげしい音に呪のろいの声を叫びながら、砕
かれました。そうして焼かれて、立派りっぱにセメントになりました。

ほね にく たましい こなごな わたし こいびと いっさい
骨も、肉も、魂も、粉々になりました。私の恋人の一切はセメントになってし
まいました。残ったものはこの仕事着のボロ許りです。私は恋人を入れる袋を縫っ
ています。

わたし こいびと わたし つぎ ひ てがみ か このたる
私の恋人はセメントになりました。私はその次の日、この手紙を書いて此樽の
なか しま こ
中へ、そうっと仕舞い込みました。

ろうどうしゃ ろうどうしゃ わたし かわいそう おも
あなたは労働者ですか、あなたが労働者だったら、私を可哀相だと思って、お
へんじくだ
返事下さい。

このたる なか なに つか わたし し ごぎ
此樽の中のセメントは何に使われましたでしょうか、私はそれが知りとう御座い
ます。

わたし こいびと いくたる ほうぼう つか
私の恋人は幾樽のセメントになったでしょうか、そしてどんなに方々へ使われる

のでしょうか。あなたは佐官屋さんですか、それとも建築屋さんですか。

私は私の恋人が、劇場の廊下になったり、大きな邸宅の塀になったりするのを見るに忍びません。ですけど、それをどうして私に止めることができますよう！

あなたが、若し労働者だったら、此セメントを、そんな処に使わないで下さい。

いいえ、ようございます、どんな処にでも使って下さい。私の恋人は、どんな処に埋められても、その処々によってきっといい事をします。構いませんわ、あの人は気象の確りした人でしたから、きっとそれ相当な働きをしますわ。

あの人は優しい、いい人でしたわ。そして確りした男らしい人でしたわ。未だ若うございました。二十六になった許りでした。あの人はどんなに私を可愛がって呉れたか知りませんでした。それなのに、私はあの人に経帷子を着せる代りに、セメント袋を着せているのですわ！あの人は棺に入らないで回轉窯の中へ入ってしまいましたわ。

私はどうして、あの人を送って行きましょう。あの人は西へも東へも、遠くにも近くにも葬られているのですもの。

あなたが、若し労働者だったら、私にお返事を下さいね。その代り、私の恋人の着ていた仕事着の裂を、あなたに上げます。この手紙を包んであるのがそうなのですよ。この裂には石の粉と、あの人の汗とが浸み込んでいるのですよ。あの人が、この裂の仕事着で、どんなに固く私を抱いて呉れたことでしょう。

お願いですからね。此セメントを使った月日と、それから委しい処書と、どんな場所へ使ったかと、それにあなたのお名前も、御迷惑でなかったら、是非々々お知らせ下さいね。あなたも御用心なさいませ。さようなら。

松戸与三は、湧きかえるような、子供たちの騒ぎを身の廻りに覚えた。

彼は手紙の終りにある住所と名前とを見ながら、茶碗に注いであった酒をぐっと一息に呷った。

「へゞれけに酔っ払いてえなあ。そうして何もかも打ち壊して見てえなあ」と呶鳴った。

「へゞれけになって暴れられて堪るもんですか、子供たちをどうします」

細君がそう云った。

彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。

—— 一 九 二 五 、 一 二 、 四 ——